

舞踊家が照明をどう考えるか

河野 潤（舞踊家）

モダンダンス、いわゆる現代舞踊は、作品を創るということにおいてとても自由です。しかし、自由だからこそ厳しい、ということが照明との間にもまずあると思います。そういうことで、今回、いろいろ考えてみました。

私は30年前から、リサイタルなどの公演を行ってきました。今回、その頃に照明をどう思っただけで舞踊を創ってきたかを考え、その頃の舞台のビデオを見たりしました。まずそこに、ドラマを創りたいという思いがあったようです。それは、ずっと同じことを思いつつ、生徒の発表会や自分のリサイタルでもしてきました。

照明器材も新しいものが取り入れられると、動きの切れるもの、いわゆるジャズダンスのようなリズムのある動きをやる時に新しい器材を使って次から次へと照明変化を要求したことがあります。そうするとまた、観客も新しい照明の色やその色の変わる速さに馴れてしまいます。そういう作品について生徒に感想を聞くと「照明がすごくよかったです」という意見が返ってきて、「照明がいいのではないだろ。踊りがいいって言われないと困るよ」という話にもなりました。

私は、実はくも膜下出血を5年前にやっています。その時に生死をさまよひ、医師からは「死ぬ」と言われたのに生き返りました。

そういう体験をした時に「自分の色」というものに非常に惹かれました。臨死体験というものを3度しているのですが、その世界は黒と明るいブルーでした。エメラルドの海岸を旅行したり、鶴と一緒に空を飛んだり、いろいろと楽しい思いをしたのです。占い師にその話をしたら、「あなたはその色を全部見たから助かったのだ」と言われたのです。そういう話は疑っているのですが、その時に「この色で行こう！」と思ったわけです。これから自分が踊るときには色はいらない。一番大事なものは、自分の肉体の魂が見えるような照明を当ててもらえばそれでいい、という考えに到達してしまっただけです。

この考えは、ユニゾンや群舞の踊りについては変わってくるものと思うのですが、自分が踊っていくときには、肉体の呼吸が見えるような明かりを当ててもらえればいい、ということなのです。

今年3月の公演では、その形でもくも膜下の自分の魂をテーマに16分のソロを初めて踊ってみました（河野潤ダンストゥーループ公演、2000. 3. 25～26、本多劇場、河野潤振付「見えない天使」、五十嵐正夫照明）。

その舞台を東京シティバレエ団の石田種生先生が観に来て下さっていたので、終わってから話をしました。偶然、石田先生も交通事故を起こされ、再起不能と言われたのに今は歩いています。それで、私の作品が「よくわかった」というのです。やはり同じような臨死体験をさせていました。花びらのすごく降ってくる所を歩いていると後ろから黒い影がついて来て「お前は何かが必要なのか？」と聞くので、「僕は刃物の先が光っているような、あの青い色が欲しい」と答えたそうです。そして、その黒い影は「今、その色はここにはない」と言ったそうです。ですから、石田先生も私も、二人とも臨死体験で見た色は黒と青なのです。

そのあと、照明の大庭（三郎）先生、松崎（鬨雄）先生というのは非常にブルーを愛して使っていたのではないかと、という話になりました。これが一番、自然な色なのだと思います。

先ほどの舞台（日本大学芸術学部演劇学科創設50周年記念特別講演「江戸時代の劇場の明りを探る」）で、外の明かりという自然の色と、黒という夜の色との対比を実験的に行っていました。我々も舞台では暗転というところから始まっていきます。ですから、私個人が踊るときはもう色はいらない、一番自然に見えることがいいと考えるわけです。

「これからの舞踊照明に何を望むか」というテーマで現実的な問題としては、舞踊家と照明家のコミュニケーションが足りないということが指摘できます。

自由表現をしていながら、自分の中でもイメージがはっきりしていないと改めて感じることもあるのですが、照明家に作品を理解するまで見てもらい、動きを覚えてもらうところまでのコミュニケーションがあれば、お互いの魂が通じるのではないかと思うのです。照明デザイナーが、創作者は抽象的なものだと思って創っていても、そこに踊る躍動感やエネルギーが出てきたときには作品の見方が変わってくると思います。ソロは特にそうです。物静かに踊る人と、エネルギーを出す人と、同じ作品を両方に踊らせたときに、デザインする人がそれをどう受け止めるのか。

つまり、私が自然の明かりがいいというのは、やはり呼吸が、皮膚や魂の呼吸が見えるということで細工をしなくてもいいと思うからなのです。

照明の色も心も含めて、原点にもどるということ、私はこれからの照明家の方々に求めるところです。